

秋田県教育カウンセラー協会 第5回 “リレーエッセイ”

和をもって貴しとなす～繋がり合う相互支援を目指して～

秋田市認定こども園 保育教諭 / 秋田県教育カウンセラー協会会員
加藤和代

私は現在、秋田市の認定こども園に保育教諭として勤務している。保育と子育て。両者は似て非なるものであるが、どちらも子どもの幸福を追求するものであり、「子を育むこと」を指す。今回は保育教諭、そして一人の母親として、普段感じている思いと共に、保育と子育てを見つめ直したい。

子どもの幸せを願う上で、保育も子育ても、「社会の中で他者と認め合い、協働しながら、自己発揮をする為の力」を育む重要性を説いている。つまり保育、子育ての共通する目的は“自立”であると言えるが、それは単に「何でもできる」ことを意味するのではない。近年、レジリエンス（Resilience）という言葉が注目されている。これは復元力や回復力を意味する言葉で、心理学においては、逆境を跳ね返して生き抜く力＝「精神的回復力」という意味で使われている。大人も子どももストレスに晒されている現代社会において、このレジリエンスが大変重要なスキルであると私は考える。日本におけるレジリエンス研究は様々なものがあるが、今回は森・石田・清水・富永・Hiew（2001、2002 年）が行った研究より抽出された4因子をご紹介します。

- ① 「I AM」…自身の良い所も悪い所も受け入れていく力。
- ② 「I HAVE」…他者との信頼関係を築き、ネットワークを広げる力。
- ③ 「I CAN」…様々な困難、問題を解決していく力。
- ④ 「I WILL」…目標を自身で設定し、そこに向かって進んでいく力。

このレジリエンススキルこそが、本来保育や子育てが目指したい「自立」であり、文部科学省が提唱する「生きる力＝知・徳・体のバランスのとれた力」であると言える。

さて、私は常日頃から、保育現場に心理学の専門的知識を取り入れる必要性を感じている。“気になる子ども”の様子を細かくアセスメントし、生物心理社会モデルで捉えた“個”の姿を縦断的に記録すること、保護者が気軽に子育ての悩みや子どもの発達の不安を相談できる機会と場の提供、保育者へ適切な助言を行う専門家の存在…これらが保育現場で日常的に取り入れられるようになれば、“孤育て”と表現されるような状況は変わっていくのではないか。子どもも、保護者も、保育者も、誰も“一人で”頑張る必要などない。感謝の言葉1つ。労りの言葉1つ。温かな眼差し1つが、一筋の希望の光となることもある。点と点が線となり、そして円を描くように支援の輪が広がり、「拓かれた保育現場」となっていくことが望ましい。

さて、最後にエッセイのタイトルである「和を以て貴しとなす」に触れたい。これは、互いを尊重し合い、認め合って協力することが大切であるという聖徳太子の教えである。手と手を取り合いながら、支援の輪を広げていきたいという願いを込めて、この言葉を選んだ。全ての子どもが権利を保障されながら幸せに暮らし、健やかに成長できる“こどもまんなか社会”の実現に向け、一人の母親、保育者、そして公認心理師として、“今ここ”と、精一杯向き合っていきたい。

